



水沢で作られた最古のくくり雛



「金太郎の鯉つかみ」(市所蔵)



「恵比寿さま」(市所蔵)



親子2代による「怪童丸(金太郎)」

厚紙に綿をのせて布で包む
押し絵の技法で作られたお内裏さま。
にこやかにほほ笑む恵比寿さまや見えを切る歌舞伎役者。
江戸中期を起源として、明治・大正時代に盛んに作られた
水沢地方に伝わるひな人形「くくり雛」。
城下町に春を告げる風物詩をご紹介します。

特集

くくり雛

留守家城下町が華やぐ 春の風物詩



くくり雛とは

「くくり雛」とは、押し絵のひな人形のことです。厚紙の人形を立体的に表現するため、布地で綿を包むことから、この地方の「くるむ」「くる」という意味の方言から名付けられたといわれています。平面的なのに立体的に見えるという、不思議な魅力を醸し出している綿の厚みは、ぬくもりを感じさせます。羽子板などに見られる押し絵の技法は、奈良時代に中国から伝えられたといわれ、現在の京都や大阪で発達しました。地方によっては、このような人形を「串人形」「浮き絵」と呼びます。寛政年間(1789-1800年)には、浮世絵師の手によって押し絵型が作られ、型紙が広まっていったと伝えられています。江戸時代の信州松本では、押し絵が下級武士の家族の内職として奨励されていました。

くくり雛は、大黒様などの縁起ものや歌舞伎・浄瑠璃の役者、おとぎ話や歴史上の人物なども題材にしているのが特徴です。内裏びなと三人官女、五人ばやしのひな人形に慣れ親しんでいると、珍しく感じます。おとぎ話などを題材にしたくくり雛は「ものがたり」と呼ばれています。

水沢における歴史

水

沢で作られた最も古いくくり雛は、土屋悦郎さん(水沢区寺小路)が所有する文久2年(1862年)のもので、裏に書かれた文字から、9歳の女の子が作ったものであることが分かっています。

くくり雛の製作は、小正月から3月節句の間に行われ、手習いの師匠が教えていました。技法とともに、人形にまつわる物語や時代についての知識が、師匠から弟子へ、親子へと引き継がれていきました。

水沢では、新小路に住んでいた絵師砂金竹香が普及に努め、明治から昭和初期に盛んに作られます。竹香は、明治28年に出版した京都博覧会で押し絵に魅了されました。帰ってくると、それまでの技法に独自の改良を加え、妻りょうと共に町内の女性たちに教えました。その手順は、下絵を線描きして一片ずつ厚紙に切り、綿を布地で包み、端にこてを当てて裏面にのり付けするもの。それらを厚紙に張り裏側に竹串を付けて、木の台にさし込みます。布地には、薄手の絹などが使われていました。しかし、時代の流れとともにくくり雛作りは徐々に途絶え、飾られることもなくなっていました。



くくり雛を広めた画人
いさごちっ こう
砂金竹香 (1858-1930)

本名は菅原健治。菅原竹侶の二男として生まれ、父を師に南宗画を描いた日本画人。水沢区新小路に住んでいた。



竹香が顔を描いたという「菅原伝授手習鑑」のくくり雛(松王丸)。水沢区川口町の田中光子さん所有

歌舞伎役者や福助、金太郎も並ぶ 陽気でにぎやかな「くくり雛」